

「花蜜資源」を求めて

—アルゼンチンにおける日系人養蜂業者の移動と経営戦略—

Searching for Nectar Flowers: Mobility and Management Strategy of Japanese Beekeepers in Argentina

柚洞 一央*

Kazuhiro YUHORA*

キーワード：ハチミツ生産，採蜜環境の変化，蜂場確保，アルゼンチン

Key words：honey production, change in bee pasture, securing apiary, Argentina

I. はじめに

本稿はアルゼンチンにおける日系人¹⁾養蜂業者²⁾の近年の動向を報告するものである。養蜂業は柚洞(2006)で指摘したように、非常にマイナーな産業である。しかし、「花蜜」資源がある環境と、ミツバチを管理する一定の技術があれば、わずかな資本で新規参入が可能な産業でもある。そのため、工業や農業などの主力産業に乏しい発展途上国などでは、貧困農村地域における経済発展の手段として養蜂業を推奨している事例がいくつか見受けられる。このような養蜂業は海外移住者にとっても、移住先の生活の手段として一つの重要な選択肢になりうる。実際、海外移住事業団が1974年に発行した日系移住者に対するガイド『南米農業要覧』においても、南米では養蜂が未開拓の産業であるという指摘をしており、移住者が行う産業としての可能性を強調している。筆者はこうした移住者による養蜂業への参入に関心を抱いたが、その実態について詳細を知る資料はほとんど皆無であり、実際、どのくらいの日本人が南米で養蜂業に携わっているのか、どのような養蜂業をおこなっているのかは分かっていない。

筆者は、これまでの日本における養蜂業者への聞き取り調査のなかで、日本で養蜂技術の修行をした後、アルゼンチンに移住した日本人が数名いるという情報を耳にしていた。それらはいずれも

断片的な情報ではあったが、南米の中でも特にアルゼンチンにおいて、養蜂が移住者にとっての重要な選択肢の一つになっているという印象を持った。そこで、実際にアルゼンチンにおける日系人養蜂業者の実態を明らかにしたいと考え、現地調査を行うこととした(図1)。

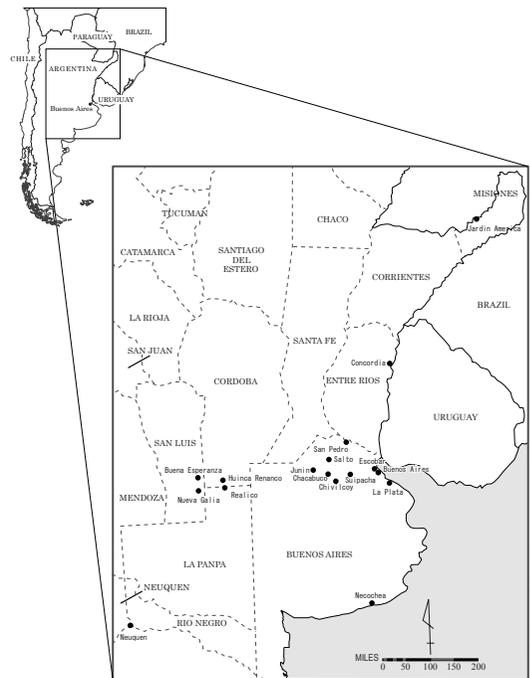


図1 研究対象地域の概要

*北海道大学文学研究科大学院生

*Graduate Student, Graduate School of Letters, Hokkaido University

今回の調査で、アルゼンチンにおいてこれまで養蜂業に携わった日系人はブエノスアイレス州ネコチェア市を中心に少なくとも23名いることが判明した。ところが、その過半数はすでに日本に帰国し、現在ではアルゼンチンにおいて養蜂業を営んでいる日系人は9名である。彼らによると、操業を始めた当時は順調に生産量を伸ばすことが出来たが、最近では厳しい状況に面しているという。特に一部の養蜂業者によると、2000年以降の生産量の減少が特に顕著であるという。こうした事態には、いったいどのような背景があるのか。また、現地で操業を続ける日系人養蜂業者は、どのような対応を示しているのか、その断片を本稿で明らかにしたい。

今回の調査では、7名の日系人養蜂業者から話を聞くことが出来た。そのうち比較的詳細なデータを記録してきた玉井氏（Apicola TAMAI(玉井養蜂園)³⁾）の事例を中心に検討を行うこととする。なお、今回の調査は予備的なものであり⁴⁾、調査期間も短く、情報量も限られている。しかし、養蜂業の展開過程における興味深い事実を知りえたので、ここに報告し、今後の研究の展望を示したい。

以下では、II章で、アルゼンチンの養蜂業の概要および日系人養蜂業者の概要を提示した上で、主要な事例である玉井氏の経営の紹介をおこない、近年の減産傾向について指摘する。III章では、減産の背景について、養蜂業が利用している外部環境の変化の面と、養蜂業界内部の動向の面から検討する。IV章では、減産傾向に対する対応策を紹介し、生産量を大きく左右する蜂場をめぐる問題について、日本との比較から検討する。

II. アルゼンチンの日系人養蜂業者と近年のハチミツ減産傾向

1. アルゼンチン養蜂業の概要

アルゼンチン養蜂業の現状に関しては、加藤（2001）が参考になる。加藤は、統計上不明確であると前置きしながらも、養蜂に関する概算の数値を提示している。それによると、アルゼンチン全体の養蜂家数は1万6000戸、総飼育ほう群数は250万群で、この数字を基に計算すると、アルゼンチンでの1養蜂家あたりの飼育ほう群数は約156群である。大規模経営を行っている養蜂業者の飼育数は、5000～1万群規模にもなるというから、全体では養蜂家や兼業の小規模養蜂業者の割合が多いと考えられる⁵⁾。飼育ほう群数を見ると、アルゼンチン全体の80.0%がブエノスアイレス州（139万6000群）、コルドバ州（30万群）、エントレリオス州（25万1000群）、サンタフェ州（5万2000群）の4州で飼育されている。特にブエノスアイレス州にはアルゼンチン全体の55.8%が集中しており、同州を中心とした湿潤パンパ地方がアルゼンチンの養蜂中心地域である。また、加藤は、湿潤パンパ以外の地域が養蜂に不向きなだけではなく、養蜂に関する認識が不足しているためであると指摘しているように、ブエノスアイレス州から離れた地域では養蜂未開拓の地域が少なからず存在しているようである。

ブエノスアイレス州ネコチェア市在住のある養蜂業者（表1・図3のC氏）によると、アルゼンチンの養蜂はブエノスアイレス州から発展したという。具体的には、1950～60年代にブエノスアイレス市周辺のスイパチャ、チビルコイ、サルタ、フニンなどの町にすでに多数の養蜂業者が存在し

表1 日系人養蜂業者の経営状況

氏名(生年)	A氏(1946)		B氏(1950)		C氏(1951)	D氏(1951)	E氏(1958)	F氏(1962)	G氏(1963)
現在の本拠地(州)	Necochea(BA)		Necochea(BA)		Necochea(BA)	La Plata(BA)	Huinca Renanco(Co)	Necochea(BA)	Nueva Galia(SL)
移住年	1967年		1973年		1977年	1978年	1984年	-	1986年
出身地	大分県大分市		大分県大分市		佐賀県武雄市	秋田県象潟町	京都府舞鶴市	Jardin America(Cor)	北海道新冠町
蜂場所在地(州)	Necochea(BA)周辺	Buena Esperanza(SL)周辺	Necochea(BA)周辺	Nueva Galia(SL)周辺	Necochea(BA)周辺	La Plata(BA)周辺	Huinca Renanco(Co)周辺、Nueva Galia(SL)	Necochea(BA)周辺	Nueva Galia(SL)周辺
現在の所有群数	3400群	1600群	300群	1000群	3200群	300群	1500群	3000群	1000群
出荷先	輸出業者		輸出業者		輸出業者	自宅にて店頭販売	・輸出業者 ・日本へ直接輸出(2年に1度)	輸出業者	輸出業者
従業員数(季節労働者数)	4(4)		(2)		4(3)	(1)	1(1)	2(3)	(1)

BA: Buenos Aires州 SL:San Luis州 Co:Cordoba州 Cor:Corrientes州(開取り調査により作成)。

ていたという。その後1980年代に入って、ブエノスアイレス州の養蜂業者は新たな蜂場を確保すべく、コルドバ州、サンルイス州、ラパンパ州などの湿潤パンパ周縁地域への進出が見られた。サンタフェ州のように行政が新たな産業として養蜂を推奨する事例もあり、今後これらの地域では新規参入者が増加することも考えられる。また、一部の大規模養蜂業者のあいだでは、季節的にミツバチを移動させる転飼養蜂を始めるケースも見受けられるが、アルゼンチン全体では移動を伴わない定飼養蜂業者⁶⁾が主である。

養蜂地域拡大の影響もあってか、アルゼンチンのハチミツ生産量は増加傾向にある(図2)。1990年まで4万トン前後で推移していたものが、その後増加し、1999年には9万8000トン、2005年には9万5000トンと、10万トン台に迫る勢いである。ハチミツの生産量は天候に大きく左右されるため、飼育ほう群数に直接比例するとは言えないが、養蜂地域の拡大、生産量の増大に大きな影響を与えていると考えられる。

2. 日系人養蜂業者の動向

現在、アルゼンチンで養蜂業に携わっている日系人は、今回の調査で確認できただけで9名である。その操業拠点の分布を見ると、ブエノスアイレス州ネコチェア市に6名、同州ラプラタ市に1名、コルドバ州ウィンカレナンコ市に1名、サンルイス州ヌエバガリアに1名である。

現在は9名程度とわずかであるが、この30～40年の間にアルゼンチンで養蜂に関わった日系人は、現在操業を続けている人以外に少なくとも14

名を数えた。14名中13名は一世であり、そのほとんどがすでに日本に帰国している。現在では日本において工場労働者や、タクシードライバーなど養蜂以外の職業に就いているようだ。彼らがアルゼンチンでの養蜂業を廃業した明確な理由は不明だが、収入が安定しないという養蜂業の特質が影響したことは確かであろう。今回の調査でも、2名の日系人養蜂業者から「できることなら養蜂業をやめたい」という話を耳にした。その主な理由として、養蜂業における収入の不安定さを指摘している。また、近年、ハチミツ生産量が減少していることも要因であるという。これらの情報は、アルゼンチンにおける日系人にとって、養蜂という職業が必ずしも容易に継続できるものではないことを示唆している。

一方で、早い時期に収穫量の多い蜂場を確保できた養蜂業者や、経営戦略を工夫している養蜂業者は、比較的持続性のある操業を行っている。今回の調査では、7名の日系人養蜂業者から現在の経営状況について聞き取り調査を行った(表1)。聞き取りによると、7名中6名が生産したハチミツを輸出業者に出荷する形式で経営を行っており、所有群数も1000～5000群と、アルゼンチンでは比較的大規模なものである。残りの1名はラプラタ市郊外という消費地に近い立地を生かして、自宅に店舗を構えてハチミツを中心とした商品の直接販売をしている。

現在経営を行っている日系人9名のうち、7名が一世、2名が二世である。二世の2名は、日本で養蜂技術を習得したアルゼンチン在住の一世に弟子入りし、後に独立した。また、一世の7名のうち最初から養蜂を目的として移住した日本人は4名である。残りの3名は移住当初、花卉栽培業や果樹園など別の仕事をしており、後にアルゼンチン在住の日系人養蜂業者との出会いをきっかけにして新規参入した人たちである。たとえば、1986年にアルゼンチンに移住したG氏(表1・図3参照)は、当初ネオケン州ネオケン市郊外のリング栽培農家で働いていた。移住後に知り合ったネコチェア市の日系人養蜂業者の様子を知り、「初期投資も少なく、比較的労働も楽で、やり方しだいでは大きな収益が得られる」ことに魅力を感じて日系人養蜂業者に弟子入りしたという。そ

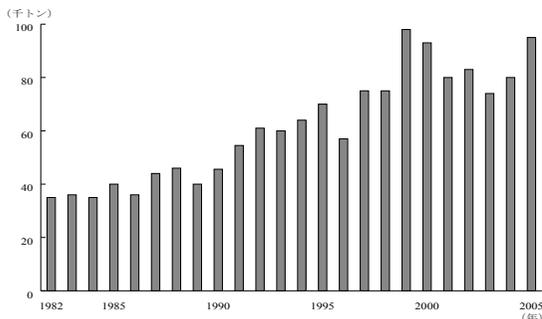


図2 アルゼンチンのハチミツ生産量推移 (Direccion de Industria Alimentaria資料により作成)。

の後、養蜂が未開発な状態であったサンルイス州ヌエバガリアに蜂場を確保し独立している。G氏の話によると、将来は牧場経営がやりたいという。というのも、養蜂という仕事は嫌いではないが、蜂場を巡る人間関係が面倒であること、ミツバチの盗難やミツバチによる農場関係者への被害が心配であることなどから、生涯の職業としては考えてはいないということであった。目標額まで資金が溜まれば、養蜂をやめて牧場経営に移行したいと語っていた。

このように、現在アルゼンチンで養蜂業を行っている日系人の経緯をみると、生活の手段として始めたケースが多いことが伺える。養蜂が「初期投資が少なく、労働も楽で、高収益が得られる」職業として、アルゼンチンにおける日系人コミュニティの中で広まっていったと考えられる。

しかし、養蜂が比較的容易に始められる職業である反面、蜜源となる花がなければ、高い収益は望めないのも事実である。そのため、経営意欲の高い業者は、より生産性の高い地域に転居したり、季節的な移動を行ったりしている。図3は、現在経営を行っている日系人養蜂業者の移動変遷を表したものである。たとえば、1978～82年にかけて、チャカブコを拠点にしていた4名（A、B、C、F氏）がネコチェアに拠点を移動している。また、1996～2000年にかけては、ネコチェアを拠点にしている日系人養蜂業者のうち3名（A、B、F氏）が、春の建勢⁷⁾のためにリオネグロへの季節的な移動を開始している。その後、より高い収穫を求めてサンルイス州などに新しい拠点を設けたり（A、B氏）、ネコチェアの業者がエントレリオス州に採蜜目的で季節的に移動した



図3 日系人養蜂業者の移動変遷

注) G氏はNecocheaで修行した後にNueva Galiaで独立。(聞き取り調査により作成)。

りするなど（F氏）、蜜源植物を求めてより遠方地域に進出する傾向が読み取れる。

3. Apicola TAMAIにおけるハチミツ生産量の減少

前節で説明したように、多くの日系人養蜂業者は、ブエノスアイレス州だけではなく、サンルイス州、コルドバ州に蜂場を設置したり、リオネグロ州に建勢のために季節移動したりすることによって、生産量の維持・増加を図ってきた。実際、アルゼンチンでは30kg/群を越えると高収益であるとされるなか、新たな移動先で70kg/群を記録することも少なくなかったという。しかし、2000年以降はいずれの地域においても生産量の減少傾向がみられるようになり、場所によっては5kg/群という急激な減少を経験している。こうした事態が養蜂業者を悩ませている。

このハチミツ生産の減産傾向については、日系人養蜂業者の多くが指摘しているところであるが、ここでは比較的詳細な経営データを記録してきた玉井氏（表1・図3のE氏）を事例に見てみよう。Apicola TAMAIの経営者である玉井氏は、コルドバ州ウィンカレナンコ市を拠点に1500群を飼育する定飼養蜂業者である。日本で1年間、養蜂技術指導を受けた後、1984年に日本からブエノスアイレス州エスコバル市に移住。当時、副業で養蜂を行っていた日系人にミツバチの管理を一任された。1987年には、ブエノスアイレス州サンベドロで150群を擁して独立。翌年、より豊富な蜜源地域を求めてコルドバ州ウィンカレナン

コ市に転居した。

図4は、Apicola TAMAIがウィンカレナンコに転居してからの飼育ほう群数とハチミツ生産量の推移を示したものである。飼育ほう群数は1988年の200群から1997年の1,353群までは増加傾向にあったが、その後は1,000～1,500群で推移している。ハチミツ生産量をみると、1999年までは増加傾向にあるが、それ以降は半減している。生産量の最高本数は増加傾向にあった最終年（1999年）の316本⁸⁾であり、300本を越えたのはこの年だけである。2000年以降は134～195本で推移しており、漸減傾向にある。つまり、飼育ほう群数に大きな変化がないのに、生産量が2000年以降激減しているのである。

次に、Apicola TAMAIの経営記録から、この収穫の減少傾向の詳細を見てみよう（表2）。まず、着目したいのが、1群あたりのハチミツ生産量の推移である。本格的な収穫が行われなかった初年度（1988年）の21.8kg/群を除いて、1999年までは平均76.5kg/群であったものが、2000～2005年では平均40.7kg/群と減少している。特に2005年は、29.7kg/群にまで激減している。全国的な水準からいえば、2005年の1群あたりの生産量もそれほど少ない量ではないといえる。しかし、ピーク時の1999年（109.2kg/群）と比較した場合、この変化は注目すべき現象といえる。

収穫期間と月別のハチミツ生産量を見ると、2000年以降、収穫期間が短縮していること、1月の収穫量が減少していることが指摘できる。収穫期間は、初めて採蜜した日から最後に採蜜を行った日までの日数である。1999年までは、80日以上収穫を行っていたが、2000年以降は65～75日で推移している。月別のハチミツ生産量では、コルドバ州の養蜂業にとって最も重要な1月の収穫量に着目したい。1999年までは、100本以上の年が4回あったが、2000年以降は100本をこえることがなくなった。2007年1月には60本を数えるだけで、1月の本数が最も多かった2000年1月の138本と比べて半数以下の状況である。

いったい、この極端な生産量の減少は何に起因するのであろうか。次章ではこの点について、Apicola TAMAIでの聞き取りの結果を中心に、隣接の農場や農牧業局で得られた情報をも加味し

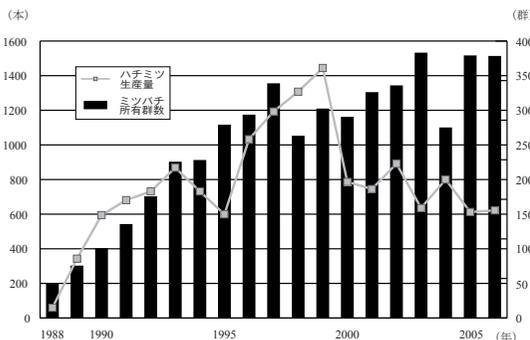


図4 Apicola TAMAIのミツバチ所有群数とハチミツ生産量の推移
(Apicola TAMAI資料により作成)

表2 Apicola TAMAIの操業状況（1988～2007）

年 度	ほう群数 (群)	収穫期間			ハチミツ収穫量 (本)				1群あたり ハチミツ 収穫量 (kg/群)
		開始日	終了日	日 数	年度合計	11・12月	1月	2・3月	
1988/89	200	-	-	-	13	-	-	-	21.8
1989/90	300	-	-	-	75	-	-	-	84.0
1990/91	400	11月27日	3月3日	96	130	30	40	60	109.2
1991/92	540	12月5日	3月2日	88	149	27	76	46	92.7
1992/93	700	12月18日	3月5日	77	160	30	76	54	76.8
1993/94	900	12月8日	3月4日	86	190	40	100	50	70.9
1994/95	910	12月19日	3月2日	73	160	20	79	61	59.1
1995/96	1114	12月7日	3月8日	92	131	40	38	53	39.5
1996/97	1172	11月25日	3月6日	101	226	55	84	87	64.8
1997/98	1353	12月19日	3月9日	80	261	34	130	97	64.8
1998/99	1050	12月11日	3月6日	85	286	80	108	98	91.5
1999/00	1207	12月10日	3月6日	87	316	55	138	123	88.0
2000/01	1159	12月24日	2月27日	65	172	30	94	48	49.9
2001/02	1302	12月22日	3月2日	70	163	9	91	63	42.1
2002/03	1341	12月18日	3月3日	75	195	55	90	50	48.9
2003/04	1530	12月15日	2月26日	73	139	28	75	36	30.5
2004/05	1098	12月28日	3月3日	65	175	10	77	88	53.6
2005/06	1514	12月19日	3月2日	73	134	32	68	34	29.7
2006/07	1511	12月18日	2月24日	68	136	32	60	44	30.2

ドラム缶 1本 = 336kgで計算。(開取り調査により作成)。

つつ考察してみよう。

Ⅲ. ハチミツ生産量減少の背景

1. 蜜源環境の変化

a. ヒマワリ

前章では、Apicola TAMAIの事例をもとに近年の生産量の激減を指摘したが、飼育ほう群数が1998年以降大きく変化していないことを考慮すると、これらの変化には蜜源環境の変動が深く関わっていると考えられる。図5は、ウィンカレナンコ市があるヘネラルロカ郡における主要蜜源植物の開花時期と流蜜状況を示したものである。流蜜が多い植物は、野生植物のアザミ、カルデン、

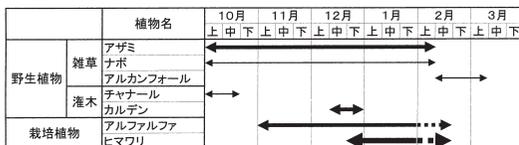


図5 春から収穫期にかけての蜜源植物の開花時期と流蜜量（ヘネラルロカ郡）

注) 線の太さは流蜜の多少を示す。
 灌木植物は流蜜が不規則。
 アルファルファ開花中にヒマワリが流蜜すると、ミツバチはヒマワリを優先的に採蜜する。
 アルファルファとヒマワリの開花時期は2月中旬までであるが流蜜は1月末まで。

(Apicola TAMAIでの開取り調査により作成)。

栽培植物のアルファルファであるが、最も大量に流蜜する植物は、12月下旬から2月中旬に咲く栽培植物のヒマワリである。

ところが、養蜂家にとって最も重要な蜜源であるヒマワリが、近年大幅に減少している。1999年まで増加傾向あったヒマワリ栽培面積は、同年の21万8000haをピークに減少し、2000年には13万3000haにまで落ち込んでいる(図6参照)。この急激な変化がハチミツ生産の激減に大きく影響していることは、容易に推察できる。特に、ヒマワリの流蜜時期が12月下旬から1月下旬であるこ

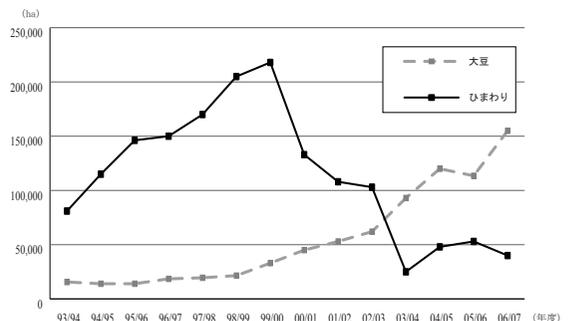


図6 ヘネラルロカ郡におけるヒマワリと大豆の作付面積推移

(INTA de Huinca Renanco資料により作成)。

とを考えると、前章で指摘した1月のハチミツ収穫量の減少傾向とも符合する⁹⁾。

このヒマワリの減少は、コルドバ州とその周辺における大豆栽培の普及と深く関連している。この点について、玉井氏が一時期採蜜を行っていたカタリーナ農場（後掲図8のp蜂場）の農場主から、具体的な話を聞くことができた。この農場は、2002年を最後にヒマワリ栽培から撤退し、大豆栽培へと重点を移した。

農場主の話によると、この地域で大豆栽培が盛んになった理由には以下の3点があるという。1点目は、降水量の増加と気温の上昇に伴って大豆栽培がしやすい環境になったことである。図7は農場主が自分の農場で個人的に記録した年間降水量のデータをグラフ化したものである。個人的なデータ収集なので、その精度は高くないと思われるが、1966年以降降水量が漸増傾向にあることはわかる。これによると、1966～1995年の30年間で降水量1,000mmを越えた年は2回だけであったが、1996年以降の11年間では6回を数えている。また、農場主の話によるとカタリーナ農場では年間の氷点下日数が、15年ほど前には約50日あったものが、現在では15日前後へと減少しているという。

2点目は、大豆の国際価格相場の上昇である。バイオ燃料の原料としての大豆需要増加から栽培が増加しているという。また、中国の大豆消費量の増大も大きく影響していると指摘する。

3点目は、大豆の品種改良と不耕起直播技術の導入である。不耕起直播技術は、播種前の耕起作業省略により生産コストの減少をもたらした。こ

れらの新しい技術の導入に関しては、浅木・玉井（2001）も指摘しているところである。

図6は、ウィンカレナンコ市が位置するヘネラルロカ郡のヒマワリと大豆の作付面積推移を示したものである。これを見てわかるようにこの地域で2000年以降ヒマワリ栽培から大豆栽培への転換が進んでいることが明確に読み取れる。このことが養蜂業にとって大きなダメージとなっている。

ところが、大豆栽培の普及は、ヒマワリの減少以外にも、養蜂業に悪影響をもたらしている。その影響とは農薬使用にある。先述の大豆不耕起直播では除草剤の使用が欠かせず、播種から収穫までに2～3回の農薬散布を実施するという。特にアルゼンチンでは、栽培面積規模が大きいためセスナ機による散布が行われることが多い。そのため、活動中のミツバチが死滅することも少なくない。また、大豆栽培用の除草剤は雑草を全滅させてしまうほどの影響力があり、アザミ等の雑草蜜源を利用している養蜂業者に大きな痛手となっている。

以上のように、この地域の農業の変化がハチミツ生産に影響を及ぼしていることがわかるが、玉井氏は別の点も指摘している。玉井氏によると近年確かに降水量は増加傾向にあるが、年ごとの格差が拡大しているという。たとえば、図7に見られるように2001年には1,270mmであった年降水量が、翌年・翌翌年には500mm台にまで落ち込み、2004年には再び1,290mmを記録するなど、変動が激しくなっている。一方、年較差については、詳細なデータは存在しないものの、玉井氏の話では、この地域の降水量は本来夏季に集中していたが、近年では12月の降水量が50mm以下と極端に少なくなることもあるという。これらの降水量の変化は2000年以降特に顕著になっているという。降水量の増減は、蜜源植物の成長・開花に直接影響するために、ハチミツ生産の不安定材料となる。

b. アルファルファ

前節では蜜源植物としてのヒマワリの減少を指摘したが、ここでは、もう一つの主要な蜜源植物であるアルファルファについてみてみよう。アルファルファは肉牛生産の飼料として栽培されているものであるが、やはり減少傾向にあるようだ。アルファルファの減少には2つの要因が挙げられ

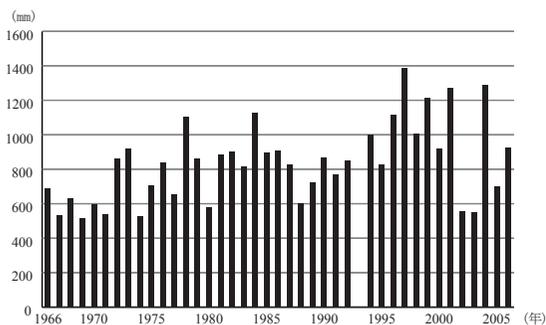


図7 ウィンカレナンコ（カタリーナ農場）における降水量推移

注) 1993年はデータなし。(LA CATALINA農場資料により作成)。

る。1点目は、先述した大豆栽培の増加である。浅木・玉井（2001）は、大豆の高収益性と、作付面積の増加に伴って牧畜は敗北せざるを得なかったと指摘しているが、ウインカレナンコ市周辺においても、放牧地が農地に転換される傾向が見受けられる。ウインカレナンコ市のあるヘネラルロカ郡の農牧業局局長への聞き取りによると、市周辺では10年前は放牧地と農地の割合が6：4で放牧地のほうが多かったが、現在では4：6で農地のほうが多くなっているという。放牧地の減少はアルファルファの減少を意味する。局長からは、他にも興味深い話を聞く事ができた。放牧地の面積は近年減少しているものの、牛の放牧頭数はここ10年で100万頭前後とほぼ横ばいの状態であるという。これは、飼育方法の技術向上などによって土地集約性がより高くなっているためである。

一方、玉井氏によると、牧畜業の変化による養蜂業への影響には、アルファルファの減少だけではなく、やはり放牧地における農薬使用の影響もあるという。従来、放牧地の土地利用は粗放的で、人為的に播種したアルファルファに混じって多くの雑草が茂っていた。特にアザミやボトンデオーロなどの雑草が建勢・飼育用蜜源として重要であった。しかし最近では、アルファルファの生長を促すために除草剤を使用するようになったため、雑草蜜源が減少し、特に春の建勢や秋の飼育にもマイナスの影響が出ている。

2. 養蜂業界内部の動向

「ここに移り住んだ1988年当時、ウインカレナンコ市に養蜂業者は数人しかいなかった。しかし、今では何人いるのかもわからないほど多くなった」。玉井氏がこう語るように、養蜂業者の増加も生産量の減少の要因となっているようだ。

ウインカレナンコ市には現在、養蜂業者からハチミツを買取って輸出する業者（以下、輸出業者）が数件ある。1980年代には、同市に輸出業者は存在せず、ブエノスアイレス州の輸出業者が買取りに来ていた。しかし同市周辺で養蜂業者が増えるにつれて、輸出業者が立地するようになったという。そのなかでもパレーデス社の取扱量は4,200トン（2006年）と、アルゼンチンで6番目に取扱量が多い業者である。パレーデス社の社長

に聞き取りを行ったところ、この地域では兼業や趣味などのいわゆる「アマチュア養蜂家」が特に増えているという。これらの養蜂家は採蜜機械を所有していない場合が多く、そのため共同採蜜施設が市内に3ヶ所以上（公的施設1ヶ所、民間施設が少なくとも2ヶ所）が存在している。養蜂業者は各自で採蜜施設を所有するため、採蜜のための共同施設が3ヶ所以上あるということは、数多くの養蜂家の存在を裏付けるものである。また、その詳細は今回調査できなかったが、ブエノスアイレス州の養蜂業者が蜜源植物を求めてウインカレナンコに進出している事例も増加していると耳にした。いずれにしても、ミツバチを飼育してハチミツを収穫する人が増えていることは確かである。コルドバ州農務省の養蜂生産者番号が近年3桁から4桁に変更されたことも、養蜂家の増加傾向を示す傍証となるだろう。

養蜂家が増加したことを示す具体的な事例として、蜂場の利用状況についてみてみよう。Apicola TAMAIでは現在、15農場にミツバチを設置しているが、そのうち12～13農場には他の養蜂家もミツバチを置いている。つまり、玉井氏が独占的にミツバチを置いているのは2～3農場のみである。玉井氏がウインカレナンコ市に拠点を移した当時は、同じ農場に複数の養蜂家が設置するケースは見られなかったが、その後、徐々に増えていった。農場主が養蜂を始めたケースも過去に3農場あり、うち2農場からは「追い出された」という。

では、蜂場の密度がどの程度まで高くなるとハチミツの収量に影響がでるのだろうか。玉井氏によると、巣箱の設置場所間の距離は1km以上空けることが常識で、500mまではなんとか許せるが、300mになると生産量への影響が大きすぎるので困るという。Apicola TAMAIが利用している農場の中には、200m隣で別の養蜂家がミツバチの巣箱を設置している所がある。飼育者同士で話し合いが行われることもあるが、解決は難しいようである。

では、いったいなぜ増加しているのだろうか。もちろん、蜜源植物が他地域と比べてたくさんあるからというのが第一の理由であろう。しかしそれだけではないようだ。他の理由として挙げられ

るのは、ハチミツの買取り価格上昇とこの地域の産業構造の問題が挙げられる。

ハチミツの買取り価格は、国際相場に連動する形で変動する。この地域では2001年までは、ハチミツ1kg≒US\$1で推移していたのが、2002、03年にはUS\$1.9と倍になっている。このような買取り価格の急騰に伴い、思いがけない事態も生じている。つまり「ミツバチ泥棒」の増加である。Apicola TAMAIでは2002～04年の3年間で、合計約270群が盗難の被害にあっている。なお現在では、買取り価格は1kg≒US\$1あたりまで戻っており、盗難の被害も同時に収束している¹⁰⁾。

ほかにも、貧富の格差の問題がある。アルゼンチンの農業地域では、大規模農場を持つ富裕層と、小作人である貧困層との経済格差が著しい。特にウインカレンナコ市周辺でも、この農場主と労働者の2極構造が顕著である。こうしたなか、貧困層の経済的向上と地域産業の活性化を手段として、少ない初期投資で始められる養蜂業が着目されつつある。たとえば、ウインカレンナコ市では文化講座として養蜂技術を学ぶコースが開設されている。受講料が低額に設定されており、労働者層でも気軽に参加することが可能で、実際、これまでの受講生のうち少なくとも15名が養蜂を始めている。このように、近年は養蜂家の増加という現実があり、そこから蜂場の確保をめぐる問題も大きくなりつつある。

以上、本章では2000年以降のハチミツ生産量の減産傾向の背景を、蜜源環境の変化と、養蜂業界内部の動向から説明した。では、こうした状況の中で、日系人養蜂業者はどのような対応を示していたのであろうか。この点について次章で検討する。

IV. 蜜源環境変化への対応

「蜂場獲得なんて、早い者勝ちなんだよ」。ある日系人養蜂業者は吐き捨てるように言う。

ここでは、アルゼンチンにおける蜂場獲得についての具体的事例を見る前に、比較対象として日本の蜂場利用の慣習について概観しておこう。

日本では、蜂場利用に関しての主な交渉相手は他の養蜂業者である。ミツバチを置かせてもらう地主との交渉よりも、周囲の養蜂業者との調和

が重要になる。これは、日本の蜂場が飽和状態であること、蜂場利用の先取占有権の意識が定着していること、養蜂業者の組合組織の力が大きいことなどに起因する。たとえば、アカシアの密集地帯として有名な秋田県小坂町では、各養蜂業者が一定以上の間隔を空けて巣箱を設置することが組合内で取り決められている。仮に地主から巣箱設置の承諾を得たとしても、当該地域の養蜂組合で承認されなければ蜂場利用の公的許可は得られない¹¹⁾。また、良好な蜂場は、インフォーマルな組織であるスジヤナカマによって独占的に利用されている場合が多い。これは、養蜂業界内部において既得権益が伝統的に認められてきたためである。これらによって、日本においては新規参入者による蜂場利用は難しい(柚洞2006)。また、蜂場を巡る養蜂業者間のトラブルも歴史的に数多く見られ、蜂場確保のためには養蜂業者—地主関係よりも、養蜂業者同士の関係をいかに構築するかが重要視されてきた。

一方、アルゼンチンの場合、各養蜂業者は農場主と個人的に交渉し、巣箱を置かせてもらうのが通例である。その際、公的機関や他の養蜂業者との話し合いは稀である。つまり、交渉相手である農場主から許可をもらえば、基本的に自由に巣箱を設置することができる。複数の日系人養蜂業者は、アルゼンチンは国土が広い国全体としては蜂場にまだ余裕があるという。そのため、養蜂業者間の話し合いをするための組織も存在せず、アルゼンチンの養蜂業者は新規参入でも比較的自由に生産活動が出来る環境にある。しかし、逆に言えば、蜂場利用の先取占有権が確立されていないために、同じ蜂場で複数の養蜂業者が競合するという事態も頻発している。つまり、アルゼンチンでの蜂場獲得は必ずしも「早い者勝ち」の世界ではないのである。

では、こうした混沌とした状況のなかで日系人養蜂業者はどのような蜂場確保の努力をしているのだろうか。再び、Apicola TAMAIの事例を見よう。

玉井氏は、1988年にウインカレンナコ市に拠点を移した当時、4つの農場を利用していた。その後、利用先の農場における栽培作物の変更や、農場主の都合等によって利用先を変更させながら

主の親しい友人が当該の農場で新規に養蜂を始めたというケースや、より高い蜂場使用料を支払う別の養蜂業者が現れたというケースが考えられるという。こうしたなか、玉井氏は金銭面よりも人間関係を重視するという姿勢を取り始めている。これは、農場主とのより親密な関係を構築することで、蜂場を失うという事態を避けることを意図している。玉井氏は、アルゼンチン社会では最終的には、このような「コネ」が重要であると考えており、「この国では、『おカネ持ち』より『おコネ持ち』であることが重要なんだよ」と表現する。

玉井氏は、「コネ」を作り、維持する手始めとして、数年前から、蜂場利用している農場の農場主を招いて、自宅で「寿司パーティ」を開催するようになった。これは、農場主－農場利用者というビジネスの関係だけで終わらせず、私生活においても交友関係を結ぼうとするものである。このような「日本的なもてなし」を実践し、農場主との親密な関係を構築・維持することによって、これまで獲得した蜂場をより長期的、効率的に利用するための素地を作ることが、玉井氏の狙いである。実際、パーティに1回しか参加していない農場主でさえ、玉井氏に対して特別な交友関係を感じ、「アミーゴ」としての蜂場利用を認めてくれるなど、その効果は大きなものがあるという。こうした努力は、Apicola TAMAIの持続的経営を可能にしている重要な要素といえるだろう。

「早い者勝ち」。これは、本来、日本の先取占有権を表すのに適した言葉である。それをアルゼンチンにおける養蜂業界を表す言葉として使うことは適切ではないように思われる。アルゼンチンでは、養蜂業の展開過程としては初期段階であり、蜂場の獲得という部分においては、確かに先取的な性格、つまり「早い者勝ち」の側面がある。実際、日系人養蜂業者は少なくとも過去20～30年来、まだ養蜂が行われていない地域において常に新たな蜂場を探し続けてきた。しかし、玉井氏の事例で見たように、近年の蜂場使用料の高騰や、「コネ」の強弱によっては、いったん獲得した蜂場でも失ってしまうことが多い。つまり、獲得した蜂場を維持するための努力が重要になってきているのである。

V. おわりに

今回の調査は、アルゼンチンにおける日系人養蜂業者の実態を知りたいという素朴な疑問から始まった。今回は予備的な調査ではあったが、アルゼンチンの養蜂業においては、日系人が新しい蜂場開拓を積極的に進め、養蜂のフロンティア地域を拡大する役割を果たしてきたことが分かった。かつては、養蜂業の未開拓地域に行けば、容易に新たな蜂場を獲得することができ、経営規模を拡大することによって、いくらでも生産量を増加させることができた。しかし、2000年以降はハチミツ生産量が激減するという事態に直面した。そこには、気温・降水量の変動や、蜜源植物となる栽培作物の転換といった蜜源環境の変化に加えて、アルゼンチン人養蜂家の増加や、蜂場利用をめぐる規範の欠如といった社会的な問題が大きく影響していた。

このような採蜜環境の変化のなか、日系人養蜂業者は、蜂場を確保・維持するための戦略として、単に別の地域に移動して新たな蜂場を開拓するというだけでなく、蜜源を提供してくれる農場主との緊密な関係を構築するという点を重視する傾向にある。

アルゼンチンにおける養蜂業をめぐる動きは、ようやく養蜂業の可能性に対する認識が形成されてきたという段階であるにもかかわらず、筆者が想像していた以上に動きが激しく、今後の展開については、短期的な予測すら困難である。さまざまな環境の変化と養蜂をめぐる社会的・経済的变化のなかで、今後、効率的・平和的な蜂場利用を目指して、何らかのルールや規範が作られていくのであろうか。あるいは、現在の過剰とも言える競争が、養蜂という産業の停滞を招くことになるのであろうか。いずれにせよ、多くのアルゼンチン人養蜂家が参入してきたことで、同国の養蜂業を考察し理解するためには、日系人だけではなく、アルゼンチン人養蜂家をも対象に含めた形での調査が不可欠になるであろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、ウィンカレンナコ市の玉井光氏をはじめ、アルゼンチン在住の日系人養蜂家の方々に多大なご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 一般的に、「日系人」とは一世を含んで定義されている。外務省大臣官房領事移住部『海外在留邦人数調査統計』では、日系人を「日本国籍を有する永住者及び日本国籍を有しないが、日系人の血統をひく者（帰化一世、二世及び三世等）の双方を含む者」としている。本稿においてもこの定義を参考にして、一世を含めて「日系人」とする。
- 2) 本稿では、ミツバチを飼育している人全体（専門が趣味かを問わない）を「養蜂家」とする。ただし、養蜂を専門としている人だけを特に示す場合には「養蜂業者」とする。
- 3) Apicola TAMAI（玉井養蜂園）は、経営者の玉井氏とアルゼンチン人の従業員の2名で構成される。従業員は玉井氏の補佐的な労働を行っているにすぎず、実質的には個人経営と判断される。本稿では、文脈によって「Apicola TAMAI」と「玉井氏」の両方の表現を用いるが、それらが示す対象はほぼ同じである。
- 4) 筆者は養蜂業における「なわばり」に関心を持っている。その形成過程を明らかにすることは資源利用を考える上で重要であろう。筆者は日本における養蜂業の歴史的展開についても調査を進めているが、明治期に始まった日本養蜂業の展開過程と比較するために、比較的新しい養蜂業開拓事例も検討したいと考えている。その一つとしてアルゼンチンを取り上げた。
- 5) ある養蜂業者の話によると、アルゼンチンでは1万群規模の養蜂業者が10数人いるという。1万群規模の養蜂業者はアメリカに数名、オーストラリアに数名しかいないといわれており、アルゼンチンは世界的にみて大規模養蜂業が可能な地域であることがわかる。
- 6) 年間を通して一定箇所でもミツバチを飼育する方法。蜜源植物が通年得られる場所で行われることが多い。これに対して、蜜源植物を求めて季節移動する方法を「転飼養蜂」という。
- 7) これは、越冬期に死滅したほう群を回復するためである。移動を行わずネコチェアで給餌することで行う業者もいるが、移動費をかけてリオネグロ州まで転飼することは、グレープフルーツやオレンジなどの果樹蜜源があること、果樹園の防風林がミツバチの交尾をしやすくするなどメリットがあるという。
- 8) アルゼンチンの養蜂業界では、生産量をドラム缶の本数で表すのが通例である。ドラム缶1本はハチミツ335～350kgである。
- 9) なお、サンルイス州のG氏によると、サンルイス州ではヒマワリ栽培の減少も重要であるが、それと同時に2000年以降灌木類の花の流蜜が激減していることも大きく影響している。この灌木類の流蜜の変化について

はその要因が確定できていない。

- 10) ネコチェア市に拠点を置くC氏も、同様に30年間で1000群の盗難被害にあっている。また、アルゼンチンでは収穫したハチミツの従業員による横流しも頻発するが、買取り価格が急騰した時期にはその被害がいっそう大きくなったという。日系人養蜂家が口をそろえていうのは、アルゼンチンでは信頼できる従業員の確保とそのコントロールが難しいということである。このため、一定程度以上に経営規模を拡大することはリスクを伴うことになる。
- 11) 日本では蜂場の設置には行政の許可が必要である。これは「養ほう振興法」によって決められている。

参考文献

- 浅木仁志・玉井明雄(2001)：アルゼンチンの穀物生産と放牧草地の利用について。畜産の情報（海外編）(144), 44-68.
- 海外移住事業団(1974)：『南米農業要覧』.
- 加藤雅史(2001)：アルゼンチンとウルグアイの養蜂現状。ミツバチ科学, 22 (1), 37-44.
- 柚洞一央(2006)：日本の養蜂業における移動空間の狭域化と生産形態の多様化。地理学評論, 79 (13), 809-832.